

燈 光



伊勢湾海上交通センターの一般公開

伊勢湾海上交通センター

令和7年7月20日（日）、愛知県田原市で開催された海の祭典「伊良湖みなとフェスタ2025」に合わせ、伊勢湾海上交通センターの一般公開を実施しました。

「伊良湖みなとフェスタ」は、令和5年に田原市の市制20周年記念事業として初開催され、以降は同フェスタ実行委員会の主催に替わり、年々賑やかさを増し

ながら今回で3回目の開催となりました。メイン会場の道の駅「伊良湖クリスタルポルト」では、三河湾クルーズ、各種ステージイベント、地元食材を使用したテント村やキッチンカーが集結し、渥美魚市場では、おさかなタッチプールやセリ体験ができるなど、子供から大人まで楽しめる伊良湖岬における一大イベントです。

伊良湖みなとフェスタ2025案内ちらし

伊勢湾海上交通センター一般公開案内ちらし

ちなみに、令和5年は伊勢湾海上交通センターの運用開始20周年でもあることから、田原市と当センターは同い年となります。日頃から心通うお付き合いをさせていただいておりますが、同フェスタは同市を含む地域関係者との結びつきを更に深める貴重な機会と

なっています。

そこで、今回は伊勢湾海上交通センターの一般公開について、準備段階から開催までの様子やトピックを簡単に紹介させていただきます。

【周知活動】

各種イベントの周知活動としては、今や定番ともいえるホームページ、SNS、報道機関への投げ込み広報などの活動を約2ヶ月前から始め、中でも、地元自治体や観光協会等からは格別の協力をいただきました。その一つとして、田原市役所にこの一般公開を含む年間イベントの周知活動協力の依頼に伺った際には、同市広報秘書課長様自らが同市の観光課や学校教育課などの関係する5部課への案内だけでなく、同席して一緒に協力要請してくれたほか、観光課長様においては「ケーブルテレビ局ではなく民放テレビ局に取材してもらいますか？」との有難い申し出（別件イベントにおいて取材調整中）をいただくなど、恐ろしいほどの協力姿勢にビビってしまいました。

また、渥美半島観光ビューロー（観光協会）に伺った際には、担当者様2名（実質のトップ2）が対応してくださり、集客策の話しで盛り上がりつつあるときに、

別のスタッフの方もその輪に加わり、いろいろなアイデアを提案してくれます。その結果として、同フェスタのメインイベントともいえる三河湾クルーズ（午後各300人乗船）の抽選結果通知用の返信葉書に一般公開案内ホームページのQRコードを載せていただくことになりました。それにしても、ここでもビビッてしまうとは。

【事前準備】

一般公開のイベント等としては、前回同様の管制室の見学、制服試着、業務紹介ビデオ上映、屋上開放（屋外眺望）、クイズラリー、来場記念スタンプ押印、業務紹介パネル展示に加え、新たに3D海底地形図展示、記念撮影用うみまる顔はめパネル展示、景品ガチャを実施することとし、これらの準備として約2ヶ月前から、構内草刈りや配布グッズの調達、製作などに取り掛かりました。

景品ガチャの実施は、当センターとしては初めてで、景品は定番の缶バッジとしました。缶バッジの製作は、平成29年以来2度目となり、当時はデザイン考案のみで製造そのものは業者委託でしたが、今回は経費削減のため全て職員施工とし、手の空いた職員により予定



配布グッズ
 広告入りポケットティッシュ
 オリジナル缶バッジ
 クイズラリー&スタンプ台紙



缶バッジ製作

数量の2000個を作り上げました。それにしても、缶バッジ製作マシーンは優秀なもので、2、3個作れば誰しもがプロ級の腕前となり、実に美しい仕上がります。ただし、プロとアマの違いは製作時間にあるようで、一般公開の数日前までマシーンを操縦することになってしまいました。

なお、景品ガチャは、クイズラリーとセットとし、各クイズ（全6問）の答えの中の1文字を順に台紙に書き込み、「か・ん・せ・い・か・ん」の完成をもつ

て景品ガチャができるというものです。これは、日頃より学生募集活動に携わる若い職員の発想であり、素晴らしいアイデアだと感心しました。

配布グッズとしてはもう1点、これも今回が初めての実施となりましたが、道の駅におけるPR用として、「海の管制官募集」などの広告入りポケットティッシュを500個配布しました。呼び込み・集客という観点では効果は大きかったのではないのでしょうか。

また、放映する業務紹介ビデオの内容を見直し、これまで、海保全体の業務紹介としていましたが、今回は当センターの若手職員がこの一般公開での活用を意識して制作した当センターオリジナルビデオとし、当センターの設立経緯や交通ルールなどを含め「海の管制官とは」を15分間に上手に纏めたもので、「海の管制官になるには」も構成に入れ込むなど学生募集もしっかりと盛り込みました。

●ここからは、一般公開当日の内容です。

【道の駅（案内・誘導、学生募集パネル展示）】

一般公開当日は、晴天に恵まれ、最高気温は32度とこの時期としては悪くないイベント日和となりました。

道の駅においては、「伊勢湾海上交通センター一般公開実施中！」のPRプラカードによる誘導、学生募集パネル展示などを実施し、隣接するフェリー乗り場においては、集客の最大のチャンスである三河湾クルーズの下船客をターゲットにポケットティッシュの配



道の駅での案内・誘導



三河湾クルーズの下船客の呼び込み
ポケットティッシュ配布



受付

布とともに、一般公開への呼び込みを実施しました。対応した新人管制官は当直中の船舶との無線交信時の冷静沈着な声色とはまるで違う、元気な声を響かせスマートに案内してくれました。

【センター玄関前（受付）】

道の駅から当センターまでの道のりは、距離約800メートル、高低差約50メートルを歩かなければならず、来場された方は皆汗だくで、ちょっとした山登り感覚を味わったのではない

も涼んでいただくこうと、昨年からは始めたキンキンに冷やした飲料配布は今回も好評でした。昨年は、来訪者数大幅増もあり途中で品切れとなっていました。が、今回は十分な数を用意したこともあり来訪者全員に喜んでいただきました。

今回の来訪者は309人で、1年目の162人、2年目の271人から着実に増加しており、これは、事前周知などに力を入れたこともありですが、道の駅で呼び込みをしてくれた少数精鋭2名の努力があつてのことは忘れません。

【センター2階会議室

(業務紹介ビデオ放映、3D海底地形図展示)

業務紹介ビデオを放映し、(予想外にも)盛況で、皆さん真剣な表情でご覧いただき、「海上交通センタ



景品ガチャ



ビデオ放映



3D海底地形図展示

1の業務だけでなく、歴史と背景を知ることができてよかった」といった感想をいただきました。
また、3D海底地形図の展示は、子供だけでなく大人の方にも人気で、その立体感に驚かれていました。

【センター3階管制室(管制室見学、制服試着)

一番人気はもちろん管制室の見学です。管制室にある予備卓を前に、眼下に広がる伊良湖水道航路の通航船と運用卓に表示される船舶映像とを比較しながらの説明に顔を乗り出し聞き入っている光景を多く目に



運用管制室



制服試着



クイズラリー⑤ 答えの1文字は「か」

① か	② ん	③ せ
④ い	⑤ か	⑥ ん
募	集	QRコード

海のクイズ開催中！
各クイズの答えに1文字書かれているよ
6文字完成させて、出口で記念品ゲット！




クイズラリー台紙
「か・ん・せ・い・か・ん」で完成

最後になりましたが、今回の一般公開を開催するにあたり、燈光会様を始めご支援ご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

【まとめ】

多くの方々にリアルな現場を見ていただき、「面白

し、「レーダー画面や目視で、伊良湖水道航路を大小様々な船が行き交う様子に圧倒され、管制業務の大変さを実感できた」といった感想をいただくなど、伊良湖水道航路における船舶交通の安全が如何に重要ご理解していただけたと思います。

また、制服の試着も小さいお子様連れには大人気で、ポーズを決めて記念撮影されておりました。

かった」、「こんな所でこんな仕事をしているとは知らなかった」などの有難いお言葉をたくさんいただきました。今後も当センターを知ることをつけに当庁全体の理解促進、知名度向上に繋がれば良いと思います。

その意味でも、今回の一般公開では、当センター業務の象徴ともいえる「海の管制官」のPRに焦点をあて、管制室の見学、業務紹介ビデオの放映だけでなく、広告入りポケットティッシュの配布やクイズラリーなどを通して、「海の管制官」をしつかりと記憶に刻んでいただけたのではないのでしょうか。

【おまけ1】

伊勢湾海上交通センターでは、今夏、この一般公開のほかに人数限定の「海の管制官体験（7／28～8／1）」、「海の管制塔見学（8／4～8／30）」を実施しました。そこで、「海の管制官体験」に参加いただいた志賀優龍さん（小学6年）から嬉しい報告がありましたので紹介させていただきます。

それは、昨年11月9日に開催した当センターの管制官体験・バックヤードツアーに志賀さんが参加され、その時に見て感じ、更に調べたことを「海の管制官～伊良湖水道の守護神～」という作品名にて執筆し、「第3回海のこども海の文学賞」に応募・投稿し、見事に小学生の部で最優秀賞を受賞されたというものでした。

海の管制官を守護神に例えるほどの持ち上げぶりに照れくさく感じるほどで、私たち職員にとつてこの上ない喜びであると同時に気が引き締まる思いです。

本作品は、「こども海の文学賞」ホームページにてご覧になれます。原稿用紙20枚分もの力作で、読み応え十分な作品ですので、是非ご一読していただければ幸いです。

【おまけ2】

冒頭の「伊良湖みなとフェスタ」紹介の中で、渥美魚市場でのセリ体験に触れましたが、渥美魚市場は、全国でも珍しい昼セリを行う市場で、一般の見学も可能となっています。主に水曜、土曜を除く日の午後1時30分から行われ、小さい市場故に至近距離から地魚がセリ落とされる様子がご覧になれます。是非一度足を運んでみては如何でしょうか。ついでに伊勢湾海上交通センターの見学はいかがでしょうか？秋以降も一般公開等のイベントを計画していますので、当センターのホームページ等でご確認の上、お越しください。お待ちしております！



企画展「海の守護神」の展示と講演会

伏木海上保安部 星野 宏和



富山県射水市の新湊博物館にて、7月11日～9月21日までの2か月間、第九管区海上保安本部海洋情報部と伏木海上保安部が全面協力した企画展「海の守護神」が開催されています。

海洋情報部からは、昔の測量機器や富山県の暦年の海図、そして伏木海上保安部からは巡視船やひこの潜水士の装備品、救命装具、能登半島地震発生時の救助の実態や各種訓練のリアルな動画や写真などが提供され、当庁の業務



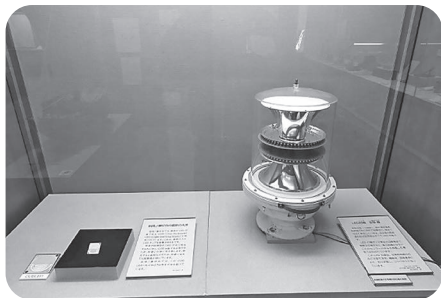
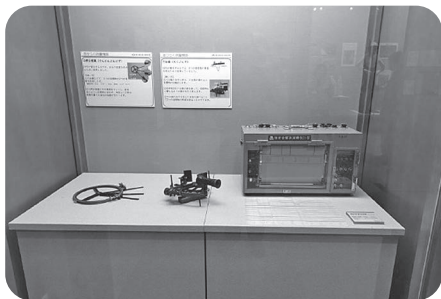
富山県射水市新湊博物館企画展「海の守護神」

が大きく取り上げられた展示となっています。灯台閣連も充実しており、地元の岩崎ノ鼻灯台の旧四等閃光レンズをはじめ、明治最初期の灯器（燈光会保管品）から令和のCOB LEDまで灯台の光源の変遷が一望できる内容となっています。

この企画展の開催中の7月26日（土）に同博物館の



潜水士の装備品と訓練時の写真



歴代の灯器と新旧のLED灯器

往年の測量機器と富山県海図

のプリズムを手にしたたり、レンズのクイズに答えてもらう参加型の内容としました。しかし、子供たちの姿は無く大人ばかりで、かなり年齢層の高い方々が大半でした。それでも、三択のクイズには、恥ずかしがら

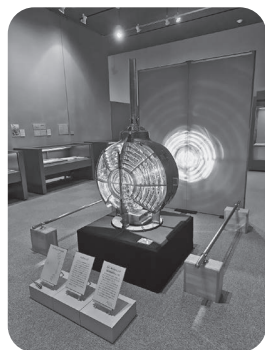


▲「とうだいレンズのふしぎ」の講演会

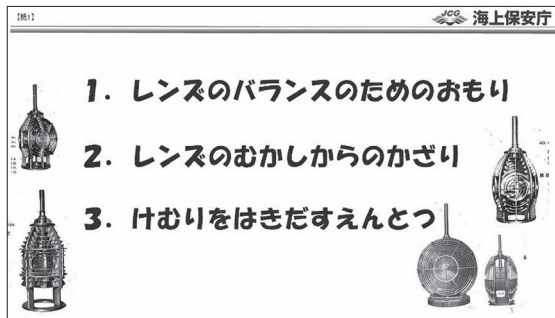
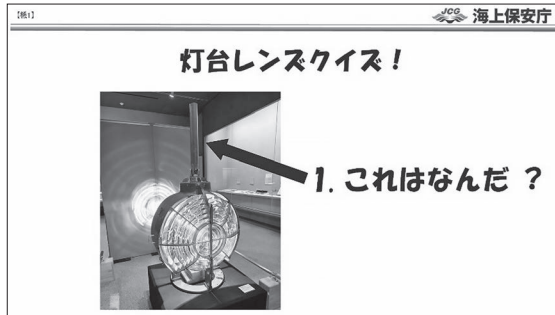
聴講室で、灯台のレンズを紹介する「とうだいレンズのふしぎ」と題した講演を本官が担当させていただきました。

夏休み期間中のため、来場者は子供連れの親子を想定し、難しい話は無しにして、灯台のレンズ

▶岩崎ノ鼻灯台の旧四等閃光レンズ

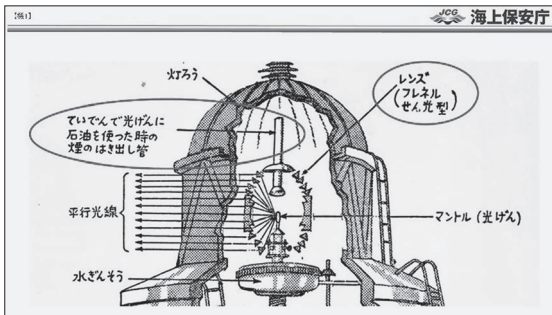
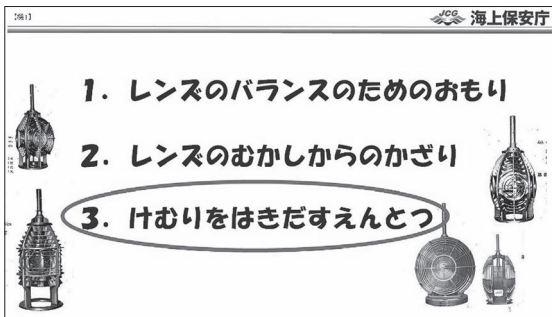


ずに手を挙げて回答いただき、正解を披露すると、皆様の笑みが大変微笑ましく見えました。
その三択のクイズは、次の2問です。



1問目は、展示している岩崎ノ鼻灯台の旧レンズの頭上に付いている金属の筒は何だろうというクイズです。三択の回答のパネルにも、同じような筒の付いた灯台のレンズを多数並べてみました。これらは岩崎ノ

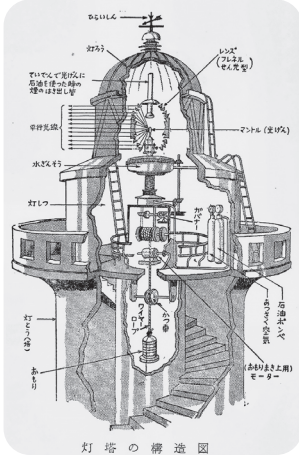
鼻灯台のレンズを製作した協和光機株式会社のカタログに掲載されていた同時期のレンズです。当時はこの筒が付いた形状が灯台レンズの標準であったことが分かります。会場では、3の「けむりをはきだすえんとつ」の回答に対する挙手が、圧倒的に多く見られました。



もちろん正解は右のパネルのとおり3番です。岩崎

ノ鼻灯台は、昭和26年5月に点灯開始した戦後に設置した灯台で、海上保安庁が昭和27年1月に編纂の燈台表第一巻にも記されているとおり、点灯開始当時から灯火は電球（250W）でした。しかし、戦後間もない当時、日常的に起きていた停電時には、石油灯器が取り付けられ、灯器の煙や熱気をレンズ内から吐き出させる吐煙管が、緊急時の対応用としてレンズに当たり前のように取り付けられていたのです。それが昨年10月にLED化で撤去されるまで、取り外されずに、70年以上も当時のままの姿で運用されていたことになります。

実はこのクイズの前に、正解が書かれた昔の灯台の内部を紹介した図を披露しており、拡大した説明文を読み上げ、昔は停電が多かったようすとの話題を出すと、大勢の方があなずいていました。同図は、昭和33年に発行の海上保安庁灯台部監修「灯台は生きている」という冊子に掲載



灯台の構造図

載されている灯塔の構造図で、当時もまだ停電時には石油灯器が設置され、おもり（分銅）の上げ下げでレンズを回転させていた知られざる事実が見られます。次の2問目は、レンズの形に関する一般的なクイズです。

灯台レンスキイズ！



2. なんでこんな形なの？

1. レンズの重さをはかるくするため

2. レンズのよごれを見やすくするため

3. ひかりをまっすぐに出すため

クイズの前に、灯台レンズは光源が石油灯器などの乏しかった時代、拡散する光を集めて強くして出すた

めのものとの説明を行っていたため、3の「ひかりをまっすぐに出すため」の回答者がほとんどでした。

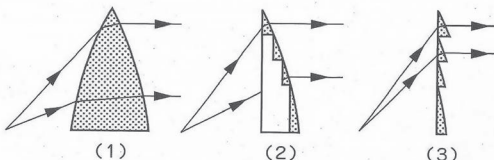
CMR1 JCG 海上保安庁

1. レンズの重さにかかるくするため

2. レンズのよごれを見やすくするため

3. ひかりをまっすぐに出すため

CMR2 JCG 海上保安庁



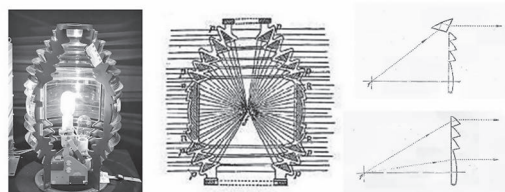
(1) (2) (3)

レンズをうすくしてもひかりの方向は変わらない

もちろん正解は、1と3の両方です。1の回答者が誰もいなかったのは、3択にしたからかもしれない。子供たちの「なりんだ、ひとつじゃないのか」という反応を期待していましたが、大人たちは、薄くしたレンズでも同じ光が出るという説明に皆真剣に聞いて

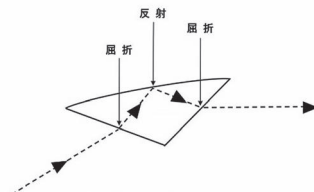
いました。ひかりをまっすぐに出す説明は、写真や図を使い、また特異な折射レンズについては、現物にレーザーポインターで光を当て、まったく見当違いの方向へ光が向かう様子を披露し、同レンズを全員に実際に手にしてもらいました。

CMR1 JCG 海上保安庁



レンズから水平に出ていく灯台のひかり

CMR2 JCG 海上保安庁

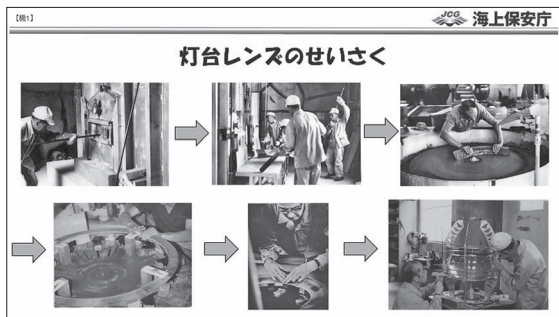
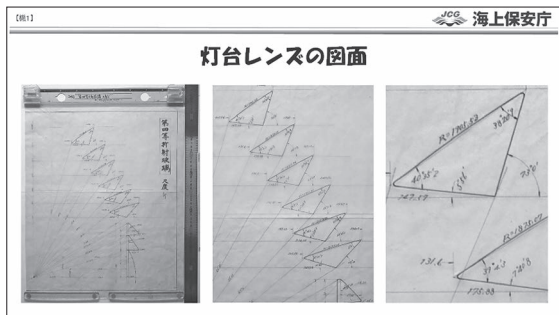


反射 屈折 屈折

せっしゃ
折 射 レ ン ズ

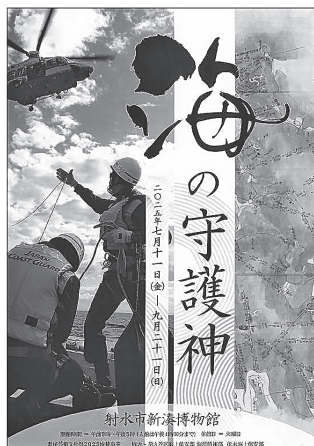
最後に、本官が前職の海上保安試験研究センターで知り得た灯台レンズが百分の一ミリ単位で製図されて

講演後は、レンズや灯台への多くの質問がありました



いたことや、海上保安庁の工場でレンズ職人と呼ばれた専属の職員が手作業でレンズを作っていたことも当時の写真や図面を披露し紹介しました。この辺りの話は、子供よりも大人の方が感動して存分に楽しめましたよとの感想を、当日聴講いただいた当部の管理警救担当次長の森田様からお聞きしました。

た。レンズが無くなりLEDだけで光の強さは同じなのか？ GPSがあるのに灯台はまだ必要なのか？ 灯台の赤や緑や白の光の意味は？ などなど、灯台に対するいろいろな疑問や意見を聞くことができて、本官も存分に楽しめた講演会でした。



新湊博物館企画展「海の守護神」案内チラシ

情報システム課程の経ヶ岬灯台校外実習

海上保安学校 航行援助教官室

海上保安学校情報システム課程第33期生（2年生）

は、令和7年6月17日（火）、舞鶴海上保安部交通課の協力を得て、京都府京丹後市に所在する経ヶ岬灯台で実習を行いました。

経ヶ岬灯台での実習は、滞在勤務を経験するための宿泊を伴う実習から日帰りでの実習へと形を変えながらも、灯台課程から継続して実施してきた歴史ある実習です。しかしながら、令和7年度から情報システム課程の採用が終了したため、今回の実習で経ヶ岬灯台の実習が終わりを迎えることとなります。

諸先輩方の記憶に残っている実習の一つであり、この実習が終わりを迎えることに寂しさを感じますが、学生達は、現在も現役として活躍し続けている明治期灯台に感銘を受けるとともに日本に5つしかない第一等フレネルレンズの大きさに驚がくしていました。また、必死に吸収しようと舞鶴海上保安部職員の説明に耳を傾け、メモを取り、時には質問し、知識の習得に

努めていました。

学生達は、卒業まで残り数か月。現場の仕事に興味津々です。

今回の実習にあたり、業務多忙中にもかかわらず舞鶴海上保安部交通課の皆様に快くご協力をいただきましたことを感謝申し上げます、学生達の感想を紹介させていただきます。

【実習参加学生の感想】

～情報システム課程第33期 伊藤 文那 学生～



経ヶ岬灯台の校外実習で、深く印象に残ったことは灯台守の多大な努力により灯台の維持管理がなされていたことや灯台の建設、レンズの設計に携わった方々の技術力の高さです。

日本海運の発展に伴い、明治期に日本海側の沿岸に



全員で記念撮影



灯室内の様子



電源室の様子



環境整備の様子

灯台が建設され始め、重さ5トンもあるレンズの運搬や、夜間に灯台守の職員が灯火を絶やさないように人力で分銅を巻き上げ、レンズを回転させていたことを知り感慨深かったです。

現在は技術の発展に伴い、遠隔にて灯火の点灯状況やその他機器に異常がないかを確認することでき、また、フレネルレンズからLED灯器に変更している灯台があることも実習を通して学びました。

乗船実習の際に夜間、灯台が光っている状況を確認しましたが、思ったより灯台の光が強く遠くまで届いていることに驚いたと同時に、航海のためにはなくてはならないものであると実感しました。

将来、私が交通課に配属された際には、夜間航行のために目印となる灯火を絶やすことのないよう、灯台の維持管理をしっかりと行っていきたいと思います。



情報システム課程第33期 上能 瑞翔 学生



私はこれまで灯台に関しては、海岸に建てられている船舶に対して光を照らす建物という認識しかありませんでした。しかし、今回の実習を通していかにして灯台の無人運用が

なされ、また、落雷防止のための保守システムや故障時の職員の対応など、今回の実習を通して理解することができ、灯台の保守整備に興味を持ちました。

今回実習を行った経ヶ岬灯台は、国の重要文化財に指定されており、最も大きい第一等フレネルレンズが使用され、観光名所として知られていますが、交通面でのアクセスが非常に悪く、また経ヶ岬灯台へは山道を歩いていく必要があります。機器が故障し修繕が必要になった場合、灯台へ行くことが難しくなることもあると伺いました。そしてそれは経ヶ岬灯台に限った話ではなく、灯台の必要性上、そのような灯台が多くあると聞き、交通課職員の多大な努力と苦労のうえに船舶の安全が成り立っているのだと感心しました。

実習を通して学んだことを踏まえ、交通課に配属されたときには船舶の安全を守るとの意識をもって保守管理に携わっていききたいと思います。

情報システム課程第33期 杉本 隆太郎 学生



灯台は海沿いにある光るものという知識しかなかった私にとって今回の実習はとても有意義なものになりました。乗船実習を通して灯台の灯質によりどの灯台であるかを識別する

ことができ、また海図上から自船の位置を割り出すことが可能であるということは知っていましたが、灯台がどのような仕組みで動作し、どのような保守管理が必要なのか理解できておらず、今回の実習を通し、これらの知識を身に付けることができました。また、今回実習させていただいた経ヶ岬灯台をはじめ、山道を登らないと点検に行くことができない灯台が少なく、点検に行く際は山登りに行くときのような格好に加え必要な道具を持つていく必要があるとの説明を聞き、灯台管理の大変さを理解しました。灯台は船舶の航行安全に必要不可欠なものです。多少のアクシデントがあっても灯火が消えないよう電源設備が設けられているなど二の矢三の矢が用意されていて、今後私たちが保守管理する灯台の重要性を改めて認識することができました。

今回の実習を糧に今後の勉学に生かしていきます。

情報システム課程第33期 東 悠太 学生



経ヶ岬灯台に関して事前に学習していましたが、イメージし難い部分も多く、実際に見て学ぶことで灯台に関する知識が増え、より一層理解を深めることができたとともに灯台に対する興味が高まりました。

経ヶ岬灯台に使用されている大きな第一等レンズとは対照的に、光源のランプはとても小さく、この僅かな光を22海里まで届けることができるフレネルレンズのすごさを実感しました。一方、経ヶ岬灯台は山の上にあり、灯台の保守整備や異常発生時の対応は決して容易なことではなく、現場の大変さを実感しました。今回の実習は、自身の未熟さを痛感するとともに、今の自分には何が足りておらず、それを残り限られた学校生活でどのように補っていかねばならないのかを考えさせられる大変有意義な機会でした。

現場に出て灯台に関わる機会があった際に、海 of 安全に寄与する灯台をしつかりと守ることのできるよう、知識・技能の習得に努めていきます。

情報システム課程第33期 山川 巧翔 学生



経ヶ岬灯台の実習において一番驚いたこととはランプの光の弱さです。乗船実習で船から夜間に灯台を見たときはかなり距離が離れていても光が届いていたためどれくらい灯台の光は強いのだろうと考えていました。しかし実際の光の強さは近くからでも直視できるものでとても驚きました。また、その光を強くするレンズの偉大さにも驚きました。

私は、高校在学中に海上保安学校情報システム課程のことについて調べた際に「情報システム課程の卒業後の進路の一つとして、船舶が航行する際に道しるべとなる灯台の点検を行う。」ということがあまり理解できていませんでした。しかし、校外実習を通して灯台の維持管理等について学ぶことができ、その言葉が意味していることを理解することができました。

校外実習を通して理解が深まったところもある一方で、新たな疑問が生まれこともありました。

学校の授業や実習で様々なことを学んでいき、現場で活躍できるよう精進していきたいです。



さよなら海上交通センターのラジオ局 32年の放送の歴史に幕

大阪湾海上交通センター



令和7年7月1日、大阪湾海上交通センターの中短波無線電話によるラジオ放送が終了しました。中短波無線電話放送は、平成5年7月1日の大阪湾海上交通センターの創設時から、通航船舶等へ大型船の通航予定、気象や海難等の船舶の安全航行に欠かせない情報を1651kHzと2019kHzの電波を使用し、32年間に亘り提供して来ました。

近年になり、スマートフォン等モバイル端末の普及などによって利用が減少してきたことから、7月1日、0時0分、長年使用されて来た、中短波無線電話放送システムの電源が切断され、その役目を終えました。大阪湾海上交通センターは、引き続き、レーダー、AIS、テレビカメラ、国際VHF、インターネット・ホームページ等の多様な媒体等を利用して、船舶の事故防止に努めます。



中短波無線電話放送用の運用装置

楽しい工作（その3）

藤島 充良

楽しい工作(その3)では、今年で155周年を迎えた品川燈台を取り上げることとしました。(写真―1)



写真—1 品川燈台

（愛知県犬山市）に復元保存されており、個人的には平成5年及び平成30年に訪れています。

平成5年に明治村に訪れたのは、第四管区海上保安本部灯台部監理課勤務時代で、明治村に菅島燈台付属官舎を移設した経緯から明治村とのチャネルがあり、鳥羽航路標識事務所勤務時代に菅島灯

沿 革

[illegible][illegible]

品川灯台
品川岬の南二州岬に設置されているが、昭和
見所は別冊図説1冊の別表がこれについて詳しい

※前年度の純正利益に相当する額を、当期利益の発生に当り、当期純利益の10%の割合において繰上金とされている。

写真一2 パンフレット

のをカットしてパンフレットに載せた経緯があります。(写真——2)

東京航路標識事務所は、

台を保守した経験もあり、同官舎を一度見てみたいと思ったからです。

本誌7月号でも記載したとおり、私は平成6年4月1日に東京航路標識事務所に配属されました。同日、東京航路標識事務所の庁舎及び宿舎が新築となったことから、披露式を行うこととなり、その式典にて配布するパンフレットを作成することとなりました。そのパンフレット作成時に使用した品川燈台の写真は私が所有していたもので、燈台下に娘2人が写っていたも

現在東京海上保安部に集約されましたが、その沿革は、明治3年3月に品川燈台が点灯したことに始まりま
す。品川燈台設置当初は横須賀製鉄所が管理し、工部
省燈台寮等を経て、昭和23年5月に海上保安庁が発足、
制度改正により、昭和28年8月に東京港航路標識事務
所が発足し、昭和37年4月に東京航路標識事務所に名
称変更されました。

私が東京航路標識事務所に配属されて数か月経った
頃、品川区内を自転車にて散策していたところ、台場
小学校の校門付近に灯台らしきモニュメントを偶然発
見しました。説明板によると御殿山下台場があった場
所に同小学校が位置しているとのこと、台場跡の石
垣を利用して台座とし、品川燈台を模したモニュメン



写真－3 品川燈台モニュメント



図－1 品川歴史館作成図面より

トを設置したと記載されていました。灯台関係者のた
め足を止めたのですが、都内で灯台のモニュメントが
あるとは思っておらず、不思議な縁を感じました。（写
真－3）

また、配属先にて先輩方が集められた灯台に関する
資料には目を通すようにしており、灯台の歴史を知る
上での貴重な写真はコピーしていて、品川燈台の写真
も何点かストックしていたため、今回の企画に繋が
りました。

2 第二台場にあった頃の品川燈台

徳川幕府は、江戸防備のため、大砲を備える第一か
ら第十一台場の人口島建設を計画し、第一、第二、第
三、第五、第六台場を完成させ
ましたが、残りは工事中止また
は未着工となり、明治3年に品
川燈台が第二台場に設置されま
した。（図－1）

先の大戦後、東京港拡張工事
のため台場のほとんどは撤去さ
れ、現在残っている台場は、第
三及び第六台場のみとなってお

り、品川燈台も第二台場撤去に伴い、昭和32年12月に解体され、東京都による保管の後、昭和39年に明治村に移設復元されました。

品川燈台が第二台場にあった頃は、写真―4のとおり灯塔のみであったことが伺えます。この写真は、私が平成30年に明治村に行った際、旧菅島燈台付属官舎に展示してあった資料を撮影し、灯台のみを切り取ったものです。

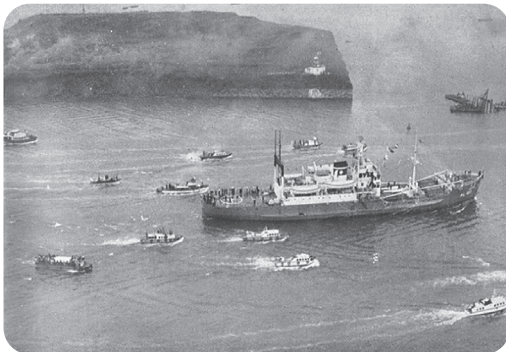
写真―5は、第二台場上の品川燈台で付属舎が併設されており、燈台西側の状況が良く確認できます。付属舎はコンクリートにて建設され、関東大震災後に追加されたようです。



写真―4 展示写真の品川燈台



写真―5 第二台場と品川燈台



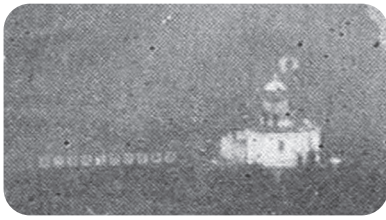
写真―6 巡視船宗谷と品川燈台

写真―6は、「巡視船宗谷」が昭和31年11月8日に第1次南極観測のため東京港晴海ふ頭を出港した際のもので、多数の見送り船が並走し、盛大な見送りが行われました。「宗谷」は戦後、引揚船を経て、海上保安庁灯台部所属の灯台補給船として使用されましたが、耐氷構造を有していたことから、昭和30年11月に南極観測船にすることが決まり、昭和30年12月24日に第三管区海上保安本部所属の巡視船に配属替えられ、昭和31年3月から約8ヶ月をかけて日本初の南極観測船

に改造されました。南極観測船は、「ふじ」以降は海上自衛隊所属ですが、「宗谷」は昭和37年4月の第6次南極観測まで従事し、以後は昭和53年まで巡視船として活躍し、現在は船の科学館に係留展示されています。

写真―7は写真―6に写る品川燈台を拡大したもので、第二台場西端にあった品川燈台には日本国旗が掲揚され、写真左側に南極観測隊への応援メッセージが書かれたと思われる掲示板があり、付属舎屋上に職員と思われる2名が上がって見送りをしている様子が伺えます。品川燈台は、昭和32年3月に廃止となりました。写真―6は廃止5ヶ月前の写真となります。

写真から付属舎の天端面が黒っ



写真―7 写真―6の品川燈台拡大



写真―8 品川燈台視察

べく見えることから、当時何らかの防水施工が施されていたと推察されます。

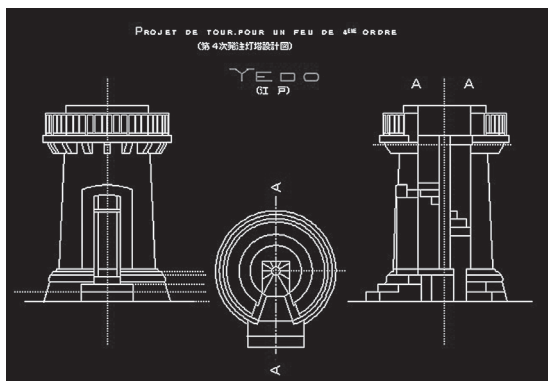
なお、海保職員で南極観測隊に通信士として派遣された方の話によれば、南極への派遣は1年間で各観測のほか、目玉は隕石の収集と伺いました。雪と氷の世界で石が落ちていれば、それは隕石であるという事です。

現在開催されている大阪万博では、2000年に南極で収集した火星の石が日本館で展示され、ヒューチヤライフビレッジでは隕石に触ることもできます。ネット情報によれば、日本は南極で1万7000個以上の隕石を収集しており、火星の隕石を15個、月の隕石を9個保有しているそうです。

写真―8は、本庁灯台部長の土井智喜氏（左から2番目）が品川燈台を視察された際に撮影されたもので、昭和30年頃の写真となります。この写真から品川燈台東側の状況が良く分かり、灯ろう点検扉の位置、東側のハリハン1枚及びハリハン半面2枚が暗弧となっているのが確認できます。

3 品川燈台設計図面の復元

品川燈台をペーパークラフトにて復元する前



図－2 品川燈台CADによる復元

私の灯台部工務課勤務時代には、灯ろう部は機器担当の灯台技術官、灯塔部は土木建築担当の灯台技術官と分掌していましたので、灯塔部のみの図面は、土建担当の図面なので、機器担当経験者としては、灯ろう部の

に、海保で保管されている資料を元に設計図面をCAD（設計支援ソフト）にて復元することとしました。（図12）
図面のタイトルには、「第4次発注灯塔設計図」及び「江戸」とフランス語で記載されています。本誌においては、図面の詳細が分かりにくいと思料されますので、3月号にて紹介したホームページ<https://furokul.jimdofree.com>に図面を掲載しておきます。

図面もほしかったところです。

4 品川燈台をペーパークラフトで再現

まずは、明治村に復元されている品川燈台をペーパークラフトにてカラー化して再現することとしました。（写真－9）

踊り場手すりを少し太くして、切り抜きできるようなしています。細かい作業になりますので、切り抜きせず取り付けても良いと思います。ハリハンは、消灯時として空の色が透けているように水色に着色しました。本作成にあたっては、内部に補強材を挿入し、少し複雑な構造としていますので、作成方法については、同ホームページに掲載の作り方を参考としてください。



写真－9

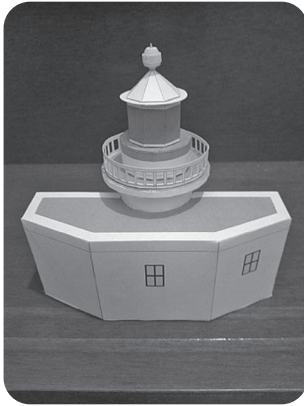
次に品川燈台に付属舎があった頃の姿を再現してみました。（写真－10、写真－11）
品川燈台の灯火は、不動紅色と記録されていました

ので、写真―10においては、ハリハン部は点灯時として再現するため赤で着色し、写真―11は、消灯時としてハリハン部を水色に着色しています。ハリハンの色は2種類用意していますので、好みでハリハンの色を選択して下さい。

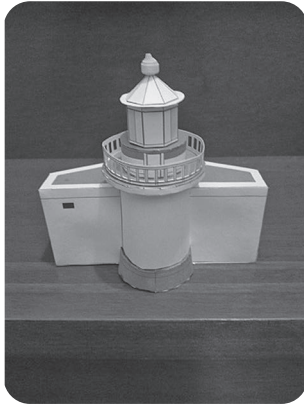
5 「巡視艇かがゆき」のペーパークラフト

今回は、「巡視艇かがゆき」のペーパークラフトを紹介させていただきます。同船は、30メートル型PCで、海上保安庁巡視船艇一覧では「かがゆき型」と整理され、同型船は26隻あります。

同船のペーパークラフト初号機は、令和3年3月、金沢海上保安部在職中に作成したもので、金沢大野郵便局にて展示されているほか、金沢海みらい図書館に



写真―10



写真―11

て毎年夏頃に企画展として開催する「海の警察・海上保安官フェスタin海みらい」の体験コーナーにて巡視船艇のペーパークラフトの展示及び型紙が配布されています。今年は7月13日(日)に同企画展が催され、これに併せ、巡視艇かがゆきペーパークラフトの再現性を高めたリニューアル版を同図書館に提供させていただいたところ、早速採用いただき、今年の同企画展にて、かがゆきリニューアル版の展示及び型紙配布を行いました。

後日、同館の遠藤様から展示された写真(写真―12)を送付



写真―12 金沢海みらい図書館提供

いただき、「多くの方にご来場いただき、かがゆきのペーパークラフトは、子どもから大人まで大人気でした。昨年のイベントで作ってくれた男の子が、前のバージョンを持ってきており、見比べながら、今年はパーツが増えている。家に帰って作るのが楽しみと、とてもうれしそうに話してくれました。」との嬉しい連絡をいただきました。

「巡視艇かがゆき」は、交通業務や緊急事案等に対応していただいたほか、対外的にはイベント等における体験航海（写真13）を通し、多くの海保ファン、市民の方に親しまれた船であることから、ペーパークラフトにて記憶に残していただけるよう感謝を込めて忠実に再現させていただきました。

6 おわりに 楽しい工作（その



写真—13 体験航海の模様

3）では、品川燈台で3パターン及び巡視艇かがゆきのペーパークラフトを紹介させていただきました。

ペーパークラフトを作成するにあたって配慮すべきことは、再現性と作りやすさのバランスです。再現性を高くすれば見栄えは向上する一方、細かい作業が伴いますので、作成を途中断念する人が出ます。このことから、作成にあたっては、A4版プリンターで印刷しても、なるべく細かいパーツは少なくして、完成品もなるべく大きくなるよう工夫しています。

この企画は、今般のSNSで配信されている「AIで100年前の写真を映像化」にて白黒写真をカラー化のうえ動画として編集しているものをヒントに、灯台ペーパークラフトをカラー化して、臨場感や温かみを感じてほしいと始めたものです。

本シリーズを読まれた現職の方から、記念イベントに併せ、灯台や巡視船の新たなペーパークラフトの作成依頼があり、このシリーズは、あと1〜2回と予定していたところ、少し増えそうな感じがしますが、次回も工夫を凝らした作品を紹介しますので、楽しみにしていってください。



明治期建設(明治16年から明治26年)北海道の灯台23基

	日本海 10基	津軽海峡 6基	太平洋 12基
1872 M4		函館(灯船)不動	
1873 M5			根室弁天島(灯竿)不動 納沙布岬(灯標)不動 納沙布岬5不動
1878 M10			
1883 M16	日和山4不動	葛巻支岬3回転	
1885 M18	泉谷岬2回転	白神岬2反射回転	
1888 M21	神威岬2反射回転	福山(松前)不動	樺雲岬1回転
1889 M22	臥島不動	恵山岬2反射回転	花咲不動
1890 M23	弁慶岬不動		厚岸5不動
	増毛不動		落石岬2反射回転
1891 M24	稲穂岬3回転		銅路崎6回転
			室蘭不動
			浦河不動
			梶泉不動
1892 M25	石狩不動、鷺泊6回転		計羅武威岬5回転
1893 M26		汐首岬3不動	
1899 M32			安達移矢岬2回転
1900 M33	稚内3回転		

太宰内(M16～M26)の灯台基数は23基

太字 大型沿岸灯台(1～3等)9基(鉄造8基、木鉄造1基)

中小型灯台(4～6等、等外)14基(木造13基、石造1基)

名前の後の数字は等級を示す。数字なしは等外を示す。

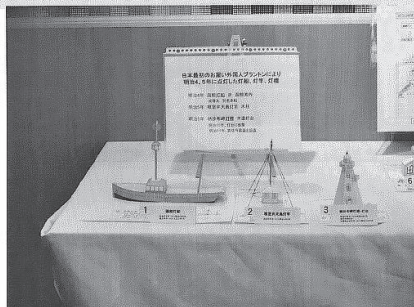
プラントン帰国後、日本人技術者により
明治16年から26年までに点灯した灯台23基



上:大型沿岸灯台(1～3等) 9基(鉄造8基、木鉄造1基)

下:中小型灯台(4～6等、無等) 14基(木造13基、石造1基)

日本最初のお雇い外国人プラントンにより
明治4、5年に建設され点灯した灯船、灯竿、灯標



北海道では明治4から明治33年までの間に28基もの灯台(航路標識)が北海道の海を照らした。特に明治16年の日和山灯台から明治26年の汐首岬灯台までの11年間に23基の西洋式灯台が点灯し、すべて日本人技術

者だけによる建設点灯であった。それ以前の西洋式灯台は明治4年5年にお雇い外国人による建設点灯灯台は3基(灯船1基、灯竿1基、灯標1基)ですべて木造でした。



北海道の開拓期を照らした西洋式灯台について

日本人による本格的な灯台建設の始まり、北海道から

北の灯霧^{とうぎり}研修生 山本 雅晴



日本燈台史（昭和44年刊行）38ページには明治21年から明治26年の間に、北海道庁北海道殖産費を使用して灯台建設が行われ、建設点灯後に引き継ぐ形で行われたことが記載されている。根拠は明治38年刊行の航路標識管理所第1年報での明治35年度までの航路標識建設の詳細を明治24年航路標識管理所発足からの経過とともに、40ページ 事業沿革 第2工事 の項目として44ページに「北海道庁建設灯台」に「…20年度ヨリ25年度二至リ北海道庁事業費ヲ以テ建設シ灯台局二引受ケタルモノ左表ノ如シ」と掲載されている。しかしながら残念なことにどのような経過でどの場所に建設に至ったかの掲載はありませんでした。

北海道庁の北海道立文書館に直接出向き確認した。

明治34年赤レンガ（北海道庁庁舎）が内部火災で明治19年北海道庁発足以来の文書は焼失、別倉庫に保管していた土地関係資料、及び北海道庁発足前の開拓史、3県時代（慶応元年から明治18年までの）資料が残っているだけとの回答があり落胆した思い出がある。

2010年3月退職以来、燈光会、北海道博物館、北海道立図書館、北海道立文書館に出向き調査する過程で明治期刊行の北海道内発刊の函館新聞などの記事に灯台に関する記事があることがわかり、明治期の新

聞調査を行い、海上保安庁（第一管区海上保安本部、同管内各保安部）に資料提供してきた。

明治22年10月13日発行の北海道毎日新聞第677号に「北海道燈台の建設」見出しで次のような文面が記載されていた。

「…又其経費は道庁に於ては1ヶ所に付九百五十円となすべき予算なりし処燈台局に於て補足の上千二百円とし無等燈台に改造することとなりたり去りながら右は現金を以て補足せらるるものにはあらず燈器等にて補足さるるものにて…」

この文面等からわかることは北海道の灯台建設に燈台局が深く係わり、予算上建設する計画の燈竿を、燈台局側横浜工場で国産化された製品の燈器など機材（フレネルレンズ以外）を使うこととし、国産化製品の提供体制が整っていたこと。もうひとつ、これまで官設灯台として建設点灯した小灯台である六等以下のフレネルレンズによる灯台は明治13年5月点灯した六等不動の口之津、明治14年3月点灯した六等不動の蔭尾島、明治19年8月点灯した六等不動の四日市、明治

19年6月点灯した等外不動の三津浜で、まだ単発的な小灯台建設点灯であった。北海道の燈台建設から本格的に官設燈台として、小灯台である六等以下のフレネルレンズ（特に等外を）による灯台を建設することとなったことである。日本で初めてのことである。

また、北海道内28基が建設点灯した地域の教育委員会（市町図書館）に対し、灯台に関係する資料（絵葉書、写真など）調査を行い、収集した資料を関係先に提供、ペーパークラフト作成の根拠として活用し、最後まで不明であった初代石狩灯台の写真を確認（詳細は平成24年燈光10月号「明治期建設の北海道灯台の姿を夢見て」）のとおりで、28基のペーパークラフトが完成することができた。

平成25年北海道立図書館にて資料で語る北海道の歴史（第13回）テーマ「北海道の開拓を輝らした光 明治の北海道の灯台と灯台巡廻船明治丸」が開催され、講演資料としても展示公開した。

では23基の灯台の概要はどのようなものであったのか。

1等から3等までの大型灯台（1等1基、2等5基、3等3基）は8基が鉄造、1基が鉄木造でした。

4等から6等、等外までの中小型（4等1基、5等

2基、6等2基、等外9基）は13基が木造、1基が石造でした。

近年出版される灯台関係書物の中で奇妙な事に、明治23年を区切りとした説明内容とすることがみうけられる。これは誤りなのだが、どうしてそうなるのか。

通信省航路標識管理所が発足したのは明治24年8月で、それ以前は通信省灯台局である。北海道での灯台建設に関する区切りは明治21年から明治26年である。多くの明治期建設点灯した北海道の灯台が忘れさられている。

実際に建設点灯した灯台（航路標識）を航路標識管理所第一年報掲載の明治35年度末航路標識便覧より記載事項の初点年月で該当する灯台を抜粋し、まとめ記載する。

表2 明治18～26年（一等灯台から三等灯台）一覧表

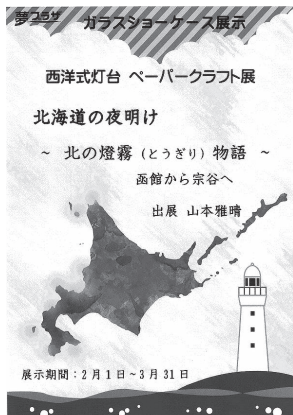
「航路標識管理所第一年報」資料の明治35年度末航路標識便覧から編集して

表3 明治16～25年（四等灯台から六等灯台、等外灯

台）一覧表

「航路標識管理所第一年報」資料の明治35年度末航路標識便覧から編集して

函館から宗谷
チラシ1

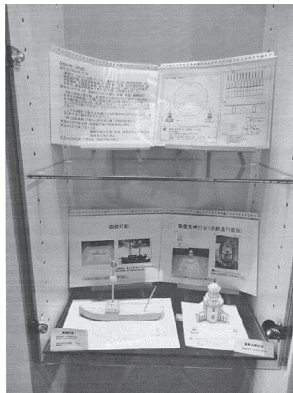


函館から宗谷
チラシ2

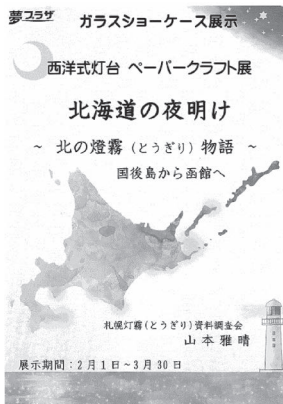
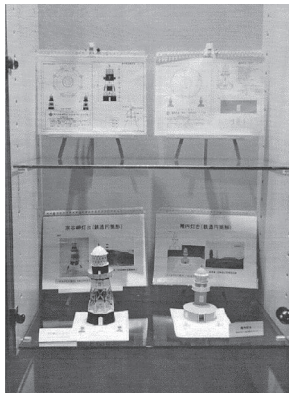


ここで絵葉書写真などのデータを元に再現した灯台
28基のペーパークラフト等を参考紹介する。
明治期の北海道の灯台について、表2、表3とともに
発表する。

展示風景
函館灯船
葛登支岬灯台



展示風景
稚内灯台
宗谷岬灯台



西洋式灯台
ペーパークラフト展
函館島から函館へ チラシ1



西洋式灯台
ペーパークラフト展
函館島から函館へ チラシ2



展示風景
安渡移矢岬灯台
計羅武威岬灯台

航路標識便覧表(M18-M26) (鉄道鉄木造)

表2 明治18～26年(一等灯台から三等灯台)一覧表
明治35年度末帝国沿岸航路標識便覧表 航路標識管理所 明治三十六年三月 より抜粋

灯台名称	宗谷岬	葛登支岬	神威岬	白神岬	横巻岬	落石岬	恵山岬	稲穂岬	汐首岬
位置	北見国宗谷郡宗谷	渡島国上磯郡茂田	後志国横手郡神峰	渡島国松前郡炭焼	日高国幌田郡小越	根室国花咲郡落石	渡島国亀田郡樺法	後志国奥田郡釣掛	渡島国亀田郡子安
初点年月	明治18年9月	明治18年12月	明治21年8月	明治21年9月	明治22年10月	明治23年12月	明治23年11月	明治24年12月	明治26年11月
構造	鉄造八角形黒白横線	鉄木造八角形白色	鉄造円形白色	鉄造六角形黒白横線	鉄造円形白色	鉄造円形黒白横線	鉄造六角形白色	鉄造六角形黒白横線	鉄造円形白色
等級及び灯質	二等 回転白色 毎30秒時間1光を発す	三等 回転白色 明暗白色 発光発射の時間12秒遮断時間8秒なり	第二等 反射回転白色 毎40秒時間1光を発す	第二等 反射回転白色 紅白互光 毎40秒時間1光を発す	一等 回転白色 毎30秒時間1光を発す	第二等 反射回転白色 毎30秒時間1光を発す	第二等 反射回転白色 毎15秒時間1光を発す	三等 回転白色 毎15秒時間1光を発す	三等 不動白色
自基礎至灯火 1丈＝3.03m 光達距離	5丈4尺 16.4m 17海里	2丈7尺 8.2m 17海里	1丈9尺 5.8m 18海里	5丈 15.2m 17海里	2丈7尺 8.2m 21海里	5丈 15.2m 18海里	5丈 15.2m 18海里	6丈 18.2m 18海里	2丈3尺 7m 17海里

航路標識便覧表(M16-M25) (木造石造)

表3 明治16～25年(四等灯台から六等灯台、等外灯台)一覧表
明治35年度末帝国沿岸航路標識便覧表 航路標識管理所 明治三十六年三月 より抜粋

灯台名称	日和山	鷗島	福山	花咲	厚岸	弁慶岬	増毛	幌泉	浦河	室蘭	石狩	釧路境	計喜武威崎	釧路
位置	後志国高島郡祝津村	渡島国檜山郡江差港	渡島国福山港	根室国花咲港	釧路国厚岸郡床たん	後志国寿都郡政治村	天塩国増毛郡弁天町	日高国幌泉郡幌泉港	日高国浦河郡浦河港	胆振国室蘭郡総村	石狩国石狩郡石狩川口	釧路国釧路郡釧路港	千島国国後郡泊村	釧路国釧路郡釧路港
初点年月	明治16年10月	明治22年9月	明治22年9月	明治23年11月	明治23年12月	明治23年12月	明治23年12月	明治24年11月	明治24年11月	明治24年11月	明治25年1月	明治24年9月	明治25年5月	明治25年12月
構造着色	木造六角形白色	木造四角形白色	木造四角形白色	木造四角形白色	木造四角形白色	木造四角形白色	木造四角形白色	木造四角形白色	木造四角形黒白横線	木造六角形黒白横線	木造六角形黒白横線	木造六角形黒白横線	木造八角形黒白横線	石造円形白色
等級及び灯質	第四等 不動白色	等外 不動白色	等外 不動白色	等外 不動白色	第五等 不動白色	不動白色	等外 不動白色	等外 不動白色	等外 不動白色	等外 不動白色	等外 不動白色	第六等 回転白色 毎15秒時間1光を発す	第五等 回転白色 毎15秒時間1光を発す	第六等 回転白色 毎15秒時間1光を発す
自基礎至灯火 1丈＝3.03m 光達距離	2丈5尺 7.6m 15海里	1丈3尺 3.9m 9海里	1丈3尺 3.9m 9海里	1丈2尺 3.6m 6海里	1丈8尺 5.5m 10海里	1丈6尺 4.8m 9海里	1丈6尺 4.8m 9海里	1丈6尺 4.8m 7海里	1丈6尺 4.8m 9海里	1丈6尺 4.8m 9海里	4丈 12.1m 9海里	2丈5尺 7.6m 14海里	4丈 12.1m 12海里	1丈5尺 4.5m 14海里

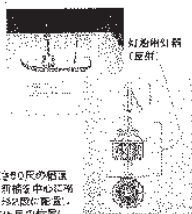
- 明治4、5年 お雇い外国人による灯台建設 3基
- 函館灯船1基、 ・「工部統計志 燈台之部 (明治十七年五月刊行)」
諸燈及諸標ノ図「函館港灯船の図」
- 灯船用灯器 (反射) ・燈台 石川源二著 灯船 209ページより
火口 120ページより
- 灯竿用灯器 ・年報附図 燈光会所蔵 第五年報 T5 附図
- 根室弁天島灯竿1基、 ・「工部統計志 燈台之部 (明治十七年五月刊行)」
諸燈及諸標ノ図「弁天嶋燈竿の図」
- 納沙布岬灯標1基 ・写真集 燈光会所蔵
- ・絵葉書『根室國納沙布燈台』写真提供、
根室市歴史と自然の資料館所蔵

函館灯船(戒礁丸)



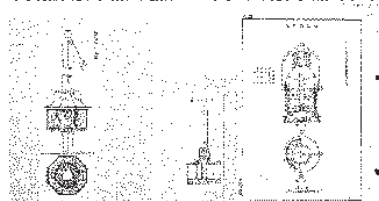
「王樹勳發心，燒製之藥，男治十九年五月世符」
領回五種藥，不「能能救世」的因。

本館は釣竿と標をとり、荷橋甲板より高さ50尺の位置に15尺の紐を常時張出し、荷橋は荷橋を中心にして90度（研究の人員を有する放射線計測部門）と2度（配置）ともので、3分間点灯してこれを能く照らすための位置に引上げ、また出射時これと下し満潮する位置で



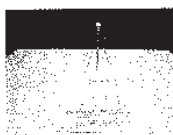
「短身 仕掛麗一著
紅印 2(95-135)」

灯船用灯器(左) 灯竿用灯器(右)



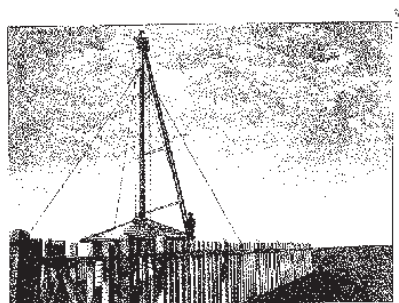
灯船用灯器(反船) 灯船用灯器(反船) 灯船用灯器

弁天島灯竿



《工部县志》 通志之部(明弘治十年五月刻本)
 物类及源流 卷四(明正德庚辰重刻本)

※お合点アップの表示してありますのでご覧ください。



之
下
有
一
大
池

納沙布岬燈標(木造六角形)
等外不動



三首應 櫻光全所誌

※組合クラブで展示しておりますのでご覧ください。

■明治16～18年 日本人技術者による灯台建設 3基 表2 表3

日和山灯台

- ・写真 小樽 鯉御殿展示 祝津町史掲載より
- ・1916（T5）年8月号、燈光口絵 日和山燈台 より灯台付近拡大
- ・「高嶋村之景」（明治末）北海道大学附属図書館所蔵、灯台付近写真拡大

日和山灯台(木造六角形) 四等不動



*灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。



宗谷岬灯台「宗谷岬灯台絵葉書」 星野宏和氏提供

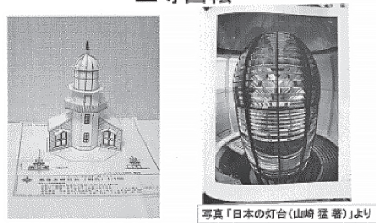
宗谷岬灯台(鉄造八角形) 二等回轉



*灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

葛登支岬灯台 「日本の灯台(山崎 猛 著)」より

葛登支岬灯台(木鉄造八角形) 三等回轉



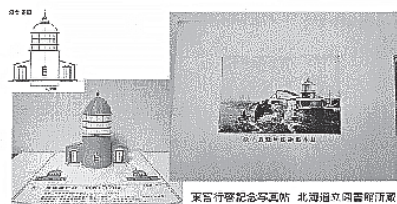
*灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

■明治19~23年 日本人技術者による灯台建設 11基 表2 表3

神威岬灯台

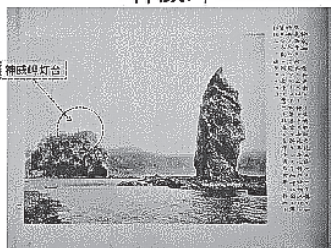
- ・東宮行啓記念写真帖 北海道立図書館所蔵
- ・写真集 東宮殿下行啓記念 明治44年 北海道立図書館所蔵
- ・『北海道の開拓と建築(下)』,(社)北海道建築士会,
1987(S62).3.3,第一法規出版,北海道立図書館所蔵

神威岬灯台(鉄造円形) 二等反射回転



* 灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

神威岬



写真集 東宮殿下行啓記念 明治44年 北海道立図書館所蔵

神威岬灯台



『北海道の開拓と建築(下)』(社)北海道建築士会、1987(S62).3.3,第一法規出版、北海道立図書館所蔵

白神岬灯台絵葉書 北海道立図書館所蔵

白神岬灯台(鉄造六角形) 二等反射回転



絵葉書 北海道立図書館所蔵

* 灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

襟裳岬灯台写真 燈光会所蔵

襟裳岬灯台(鉄造円形) 一等回転



写真 燈光会所蔵

* 灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

恵山岬灯台写真 燈光会所蔵

恵山岬灯台(鉄造六角形)
二等反射回転



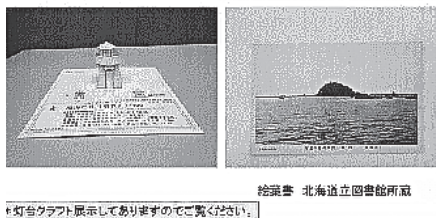
落石岬灯台写真
根室市歴史と自然の資料館所蔵

落石岬灯台(鉄造円形)
二等反射回転



松前(旧福山)灯台
絵葉書 北海道立図書館所蔵

福山灯台(木造四角形)
等外不動

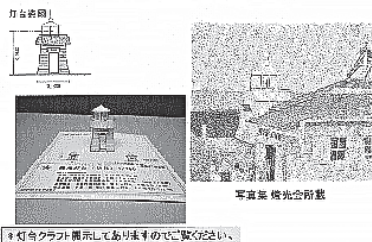


弁天島燈台北海道立文書館所蔵



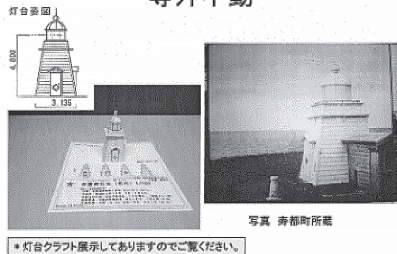
鷗島灯台写真集 燈光会所蔵

鷗島灯台(木造四角形)
等外不動



弁慶岬灯台写真 寿都町所蔵

弁慶岬灯台(木造四角形)
等外不動



増毛灯台写真 木村 進氏 提供

増毛灯台(木造四角形) 等外不動

灯台説明



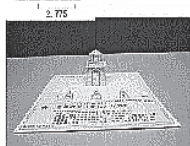
写真 木村 進氏提供

*灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

花咲灯台写真 燈光会所蔵

花咲灯台(木造四角形) 等外不動

灯台説明



昔の花咲灯台

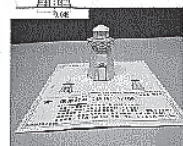
写真 燈光会所蔵

*灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

厚岸灯台絵葉書
根室市歴史と自然の資料館所蔵

厚岸灯台(木造六角形) 五等不動

灯台説明

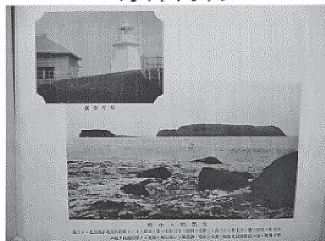


絵葉書 根室市歴史と自然の資料館所蔵

*灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

『東宮殿下行啓記念 北海道厚岸写真帖』,
北海道厚岸奉迎準備会
札幌市中央図書館蔵

厚岸灯台



『東宮殿下行啓記念 北海道厚岸写真帖』北海道厚岸町奉迎準備会,
1911M44.7発行,札幌市中央図書館蔵

■明治24~26年 日本人技術者による灯台建設 9基 表2 表3

釧路埼灯台

- ・絵葉書 根室市歴史と自然の資料館所蔵
- ・絵葉書 撮影時期不明
- ・『北海道写真帖、東宮殿下行啓記念』,喜藤孝次,小樽,
1911M44.8発行 札幌市中央図書館蔵

釧路埼灯台(木造八角形) 六等回転



絵葉書 根室市歴史と自然の資料館所蔵

＊灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。



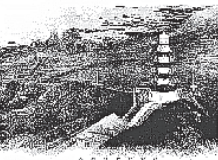
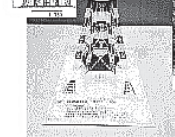
釧路埼灯台



『北海道写真帖、東宮殿下行啓記念』喜藤幸次、小冊、1911M44.8発行 札幌市中央図書館蔵

稲穂岬灯台 奥尻島稲穂灯台芙蓉写真館
絵葉書大正期
奥尻町教育委員会蔵

稲穂岬灯台(鉄造六角形) 三等回転

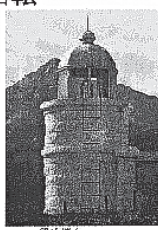
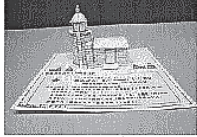


奥尻島稲穂灯台 芙蓉写真館蔵 大正期
奥尻町教育委員会蔵

＊灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

鷺泊灯台写真 利尻富士町教育委員会蔵

鷺泊灯台(石造円形) 六等回転

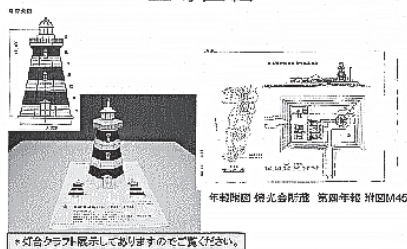


鷺泊灯台
利尻富士町教育委員会蔵

＊灯台クラフト展示してありますのでご覧ください。

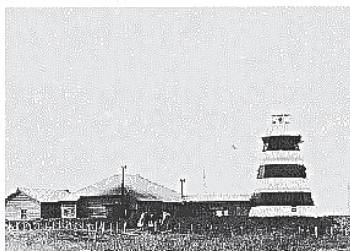
「第四年報附図 航路標識管理所」(明治45年3月刊行)
計羅武威岬灯台移築之図(第五十四図) 燈光会所蔵

計羅武威岬灯台(木造八角形) 五等回轉



写真撮影年月不詳 燈光会所蔵

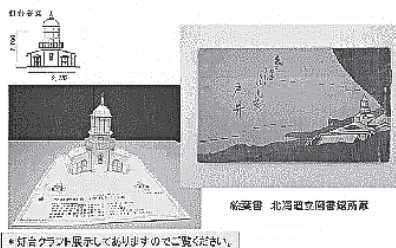
計羅武威岬灯台



写真撮影年月不詳 燈光会所蔵

絵葉書 北海道立図書館所蔵

汐首岬灯台(鉄造円形) 三等不動



汐首燈台(霧信号),函館支庁管内町村誌其四,渡島教育会,
1918(T7)年発行,北海道立文書館所蔵



写真 燈光会所蔵

室蘭灯台(木造六角形) 等外不動

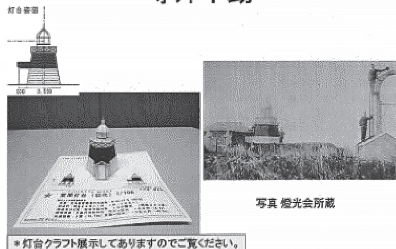


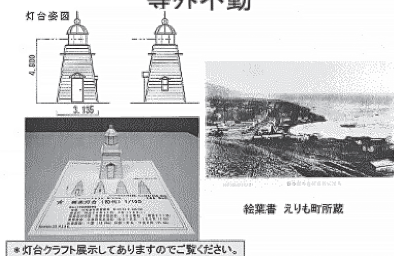
写真 浦河町所蔵

浦河灯台(木造四角形) 等外不動



絵葉書 えりも町所蔵

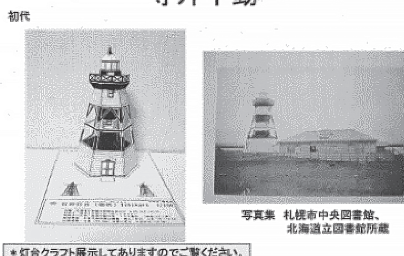
幌泉灯台(木造四角形) 等外不動



写真集

札幌市中央図書館、北海道立図書館所蔵

石狩灯台(木造六角形) 等外不動



尻屋埼灯台及び入道埼灯台の参観期間について

令和7年の参観期間は下記の通りです。
(各QRコードより参観状況を確認できます。)

尻屋埼灯台



★尻屋埼灯台★

参観期間 令和7年4月5日(土)～

令和7年11月9日(日)

参観時間 9時～16時

※4月30日までは9時～15時

燈光会尻屋埼支所 ☎ 0175-47-2889



入道埼灯台



★入道埼灯台★

参観期間 令和7年4月5日(土)～

令和7年11月9日(日)

参観時間 9時～16時

※4月6日～10月15日 土日等は
9時～16時30分

燈光会入道埼支所 ☎ 090-1931-9706



(4)

宇都宮
延昭

三机村は、1955年（昭和30年）まで西宇和郡にあった村で、現在の伊方町中部・佐田岬半島のほぼ中央に位置する農漁村であった。

町村合併により瀬戸町を経て、現在は伊方町です。北を伊予灘に、南は宇和海に面しており、中央には半島を形成する山地が横わたり、国道197号





三機の歴史は古く、その地名の由来は「御着江」とも書き、宇佐八幡の分霊が漂着した地とされている。

御鼻（佐田岬半島突端）回りを回避し、危険を避けるとともに、経路短縮しようという構想で、1610

年宇和島藩主・富田信高により、三机湾最奥の小振と宇和海側の塩成間（幅700メートルメートルと半島最狭部）の堀切掘削工事を開始、しかし1612年壮大な計画であったが中止、多数の人員が動員され、村人は困惑していたこともあり、村人の間には三崎観音の崇りで

はないかとの噂が立ったという。

後に宇和島藩に入った伊達家は北の要所として三机を重視し、番所を置いた。

参勤交代のルートは、いったん半島に上がり、三机に入って、また船に乗り換えるルートとした。

中継地としての三机には、主要な商家や町屋が形成され繁盛した。

明治以降、番所跡に小学校を開設、三机郵便局開設・三机巡査屯所開設・登記開設がされるなど、明治22年三机村となる。

漁業組合も設立され漁業は一段と盛んとなる。

同時に三机港（三津浜港（松山市）、三机港）宇品港（広島市）の定期航路開設など村の繁栄は続いた。

昭和に入り、三机湾はハワイ真珠湾を想定して、海軍特殊潜航艇の訓練地となり、1941年（昭和16年）特殊潜航艇は真珠湾に突入、太平洋戦争が開戦、三机湾で訓練した若い乗務員9名が戦死した。

戦死後、彼らは「軍神」と呼ばれ「九軍神慰霊碑」が建立された。

開戦から78年となる昨年12月8日、三机須賀公園の碑の前で、若い9名の乗務員を偲ぶ慰霊追悼式があり、地元青年団と海上自衛隊の関係者が平和を祈った。

○三机港周辺画像



この須賀公園の近くの防波堤に赤灯台「三机須賀防波堤灯台」が建っています。
防波堤は釣り場としても人気があり、釣堀のようでもあります。
また、灯台へ向かう途中から、次回紹介の襖鼻灯台が建つ岬が一望でき絶景です。

○三机須賀防波堤灯台要項

所在地	愛媛県西宇和郡伊方町三机港
塗色・構造	赤色、塔形
灯質	等明暗赤光 明3秒暗3秒

★「大八車」No.218（令和2年3月10日発行）掲載分

点灯年月日	高さ	光達距離
昭和26年3月20日	地上から灯火まで 平均水面上から灯火まで 13.6メートル 9.1メートル	4海里（約8キロメートル） 地上から構造物の頂部まで 9.2メートル

世界海事大学の日本研修生による

初めての灯台研修が実現

燈光会事務局



令和7年5月15日、犬吠埼灯台（千葉県銚子市）に世界海事大学に籍をおく30か国30名の2025年度日本研修のために来日した学生が訪れ、犬吠埼灯台及び今は役割を終えている霧笛（霧信号）の歴史、役割、建築物としての構造上の特徴などを学びました。

世界海事大学（World Maritime University※以下略して「WMU」とは、国際連合の専門機関であるIMO（国際海事機関）によって、1983年に北欧スウェーデンのマルメ市に設立された大学院大学で、主に開発途上国の海事関係者が、海事に関する教育訓練、エネルギー管理、法規政策、海上安全、海洋環境管理、海洋保全管理、港湾管理、海運管理・流通について高度な知識と技能の取得に日々取り組んでいます。

笹川平和財団海洋政策研究所では、1987年より毎年、WMUで学習に励む海事行政官を日本に招へいし、日本における様々な海事分野の現状について理解

を深める機会を提供しています。

約1週間の日本研修では、これまで約40年間、海上保安庁の各現場（防災基地、海上交通センター、海上保安学校等）、造船所、船用機械メーカー、海洋に関する研究機関などが訪問先であったところ、はじめて、沿岸部に位置する灯台での研修が検討され、東京から日帰りが可能な犬吠埼灯台が選ばれました。

同研究所にお聴きしたところ、毎年、何処か新たな研修先を模索している中で、昨年、初点灯から150周年を迎え、国内外の多くの人々に知られ、また地域の揺るぎないシンボルとして地元深く愛されている犬吠埼灯台の果たしてきた偉業に触れることは、研修目的として相応しいと判断したとのことでした。

本年2月、燈光会事務局へ研修の受け入れの可否の相談があり、長い歴史の中でもはじめて国際的な研修に直に対応することになりました。

その後の調整の中で現地の滞在時間が約1時間とさ

れたため、灯台、資料展示館、旧霧笛舎の3か所を10名ずつのグループに分けて順番に回ることにしました。

時間的な制約があるなか、折角の訪問の機会を少しでも印象深いものにできないかと思案を重ね、銚子海上保安部交通課にもご相談した結果、交通課長からは快く応援者を出していただけることになり、灯台上部の1等レンズの区画で短時間でのレンズ清掃体験を加えることになりました。

また、犬吠埼灯台のみの見学施設である霧笛舎には、初代の1等レンズが鎮座していますが、その横の空間にプロジェクター・スクリーンを置き、電化前の灯火（石油・石油蒸発・ガス）を動画で紹介するコーナーを設けました。

資料展示館も含め各部とも英語による表示は完全ではありませんが、数名の通訳者の方も同行されるとのことでしたので、要点の伝達は通訳者をお願いすることと割り切り、特に作業時の安全確保を中心に準備を進めました。

そして、当日の午後4時に研修生一行が到着しました。

対応には、燈光会事務局、犬吠埼支所職員、嘱託者の4名に銚子海上保安部交通課からの応援者2名の計

6名が当たり、まずは、研修生が一堂に会する場で、犬吠埼灯台の生立ち、国指定の重要文化財となったことの経緯などの概要を説明しました。

続いて3グループに分かれての研修がスタート、特に、レンズ区画では、研修生にとってそれまでの施設見学が説明をお聴きすることが主であったところ、新鮮かつサプライズであったようで、皆さん笑顔になり張り切って手に持ったウエスにクリーナーをつけて作業をしていました。

また、資料展示館、霧笛舎内では、犬吠埼灯台の初代1等レンズをはじめとする様々な展示品、写真、絵画等を目にし、驚きと興味を示されていました。

のぼれる灯台の中でも特に資料の展示が充実している犬吠埼灯台を訪れたことを通じて、我が国の灯台を



写真－1 レンズ磨き1



写真－２ レンズ磨き２



写真－３ 霧笛舎内での説明の様子

で紹介します。

- ・歴史的な灯台は、機能的な構造物としてだけではなく、文化的にも魅力的な場所となっている。

- ・資料展示館は、歴史、建築、灯台の様々な情報を伝えており、あらゆる年齢層の来訪者への優れた教育の場となっている。

- ・日本の初期の近代灯台を見学できる貴重な機会を提供している。

- ・単なる灯台見学ではなく、海洋国家がどうのように築かれ、そして見事に発展してきたかを目の当たりにし、様々なことを学ぶ機会となった。

- ・壮大な歴史的建造物の物語を人々に伝え、誰もが明治維新の時代を思い起こすことができる。

- ・灯台を後にする間も灯台の歴史の重みが余韻として残った。

- ・人類の創意工夫の記念碑であり、戦争の犠牲であり、時の流れを生き抜いてきた存在である。

はじめとする航路標識の発展の歴史、戦災、自然災害などの幾多の困難を乗り越えてきた経緯、そして何と言っても現役の1等レンズに直に触れていただけたことは、個々の研修生にとって貴重な経験と思い出になったのではないだろうか。

本研修からやや月日を経た7月下旬、研修生による日本研修報告書の中から、犬吠埼灯台について記載された数人の方のレポートが事務局に届きました。

分量が多く全てを掲載できませんが、幾つかを抜粋

結びに、この度、期せずしてこの研修の一端に関わ

ることとなりましたが、当日の短い時間の中での質疑応答、研修報告書の貴重なコメントを通じて、外国人の方から見た日本の灯台への思いを認識する機会を得ることができました。

当会として、今回の経験を今後の灯台参観業務、資料展示室業務へ活かして行きたいと思っています。



研修終了後 集合写真

故徳野秀次氏灯台絵画 常設展示等のお知らせ

灯光会事務局

故徳野秀次氏については、1995年から2024年に亡くなるまでの29年間に亘り灯光会の嘱託を務め、また2005年灯台絵画コンテスト開始時から2018年まで審査委員としてご尽力いただきました。「灯台を描き続けた画家 徳野秀次を偲んで（三野富士雄氏 本誌R6・11号掲載）」を参照願います。

この度、奥様の徳野順子様から故徳野氏創作の灯台絵画14作品を灯光会に寄贈・提供していただき、大型の犬吠埼灯台については犬吠埼灯台資料展示館2階ギャラリーへの常設展示の整備を進めているほか、残る作品についても期間限定の特別展示を計画しています。

これらの絵画展示の開催が決まりましたら、改めて、灯光会ホームページでお知らせいたしますので、皆様のお越しをお待ちしております。

昭和三十一年
九月二十五日
第三種郵便物認可
（隔月一回五日発行）

「燈光」

九月号
第七十卷
第五号

